

小鳥のさえずり

三ツ橋よしみ

朝はやく、小鳥のさえずりで目が覚めた。枕元の時計は4時を回ったばかり。寝床から抜け出て、窓のカーテンを少し開けてみた。東の空が薄紫色にそまっている。

「ヒーヨ、ヒーヨ、ヨー」

指笛のような鋭い鳴き声が、高い空から聞こえた。周辺の人々はまだ眠っているのだろう。どの家の窓も暗く、門燈のオレンジ色だけが妙に輝いていた。通りには人の影すらなく、早起きの新聞配達バイクだつて、まだやって来はしない。

（おはよう小鳥さん、あなたつて早起きね。澄んだとてもいい声だわ。わたし、あなたの声が好きよ。前の住まいには、あなたのような鳥はいなかった。名前はなんとというの？ わたしは都会育ちだから、鳥の種類をぜんぜん知らないの）

そんなふうに語りかけた。

先週、わたしは中目黒から祐天寺に引っ越してきた。距離にすれば、1キロばかりの引っ越したが、環境がまるで違う。



祐天寺には広い庭のある家が多い。高い木々にかこまれた家。鶯（つた）のからまったレンガ塀。古くからの重厚な住宅が建ち並んでいる。

わたしの新居の近くには、蛇崩川（じゃくずれがわ）の緑道がある。緑道は曲がりくねり、中目黒まで続く。道ぞいの花壇には、日々草花が彩りをそえている。

春過ぎても、桜の並木が散歩する人々に、木の影をなげかけてくれる。こんな新鮮な光景があるのだ。



空が帯状に明けてきた。「ヒーヨ、ヒーヨ」と鳴く鳥は、向かいの民家のテレビアンテナの上にあった。それもアンテナの一番はしに、ちよこんととまっている。

目を凝らしてみた。近眼のわたしにはどんな鳥なのか、よくわからない。灰色で、スズメより少し大きめ。尻尾がすつと伸びている。わたしがカメラを構えると、サツと飛びたつてしまった。

それからのヒーヨちゃん（勝手に名前をつけた）は、毎日、明け方と夕方に、決まってアンテナに止まり、乾いた声で鳴いている。夫に鳥の種類を尋ねてみたが、彼も都会育ちで知らなかった。

どうしても知りたくて、近くの図書館でしらべてみた。

「スズメより少し大きな、灰色の鳥」は、すぐに「ヒヨドリ」だとわかった。「甲高い声で鳴く」とも説明があった。

(なあんだ、ヒヨドリか)

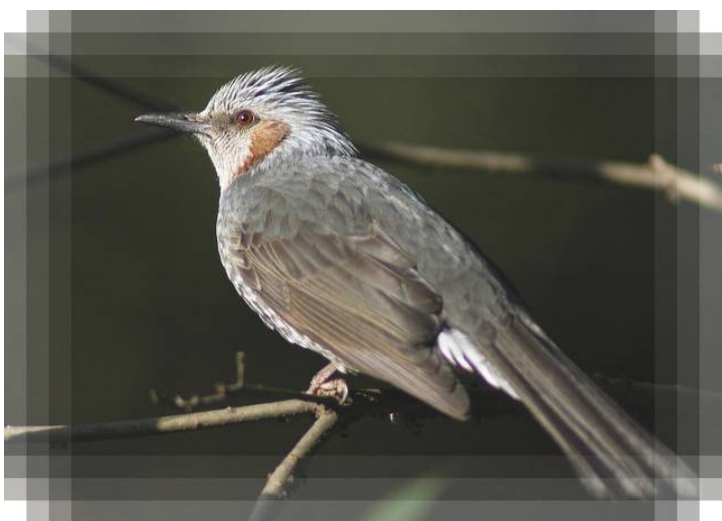
ヒーヨ、ヒーヨと鳴く鳥を、「ヒヨドリ」と名付けるなんて、なんて単純なんだろう。種類がわからなかったうちは、様々な名を思いめぐらして、ワクワクしていた。「ジョウビタキ」とか「ナイチンゲール」とか、響きのいい名前じゃないかなあ、と。

図書館にむかう時だってスキップして行ったのに。鳥の名前がわかってみたら、がっかり。新人スターを発掘したつもりが、すでに有名人だったのだから。

You Tubeで「ヒヨドリの鳴き声」を検索してみた。出てきたネット映像では、少し太ったヒヨドリが騒々しく鳴いていた。

(うちのヒーヨちゃんのほうが、ずつといい声だわ。ヒーヨちゃんは、よその子と違うんだわ)

ヒヨドリの繁殖期は6月、7月だから、きつと近くに巣があるはず。メスが卵を温めている。父親のヒーヨちゃんは、子供のために巣を守っているのだ。彼の縄張りによそ者が来ないように、テレビアンテナの上で見張っているのだろう。



私が引越してきて、ひと月ほど経っていた。

ある朝、ソファアールで新聞をよんでいた。ふとした気配から、視線をあげると、目の前にヒーヨちゃんがいた。窓の向こう

の電線にとまってこつちをじっと見ている。手を伸ばせば届きそうな、そんな距離だった。青灰色の羽で、目の下がすこし茶色だ。凶鑑でみたとおりの姿だ。英語で「Brown Fared Bulbul」という、その名にぴったりの姿だ。

ヒーヨちゃんは、ちらちら、私のほうを見ている。少し口を開けて、顔を左右にちよつちよつと振った。灰色と茶のおしゃれな羽に、すうっと伸びた尾羽。上品なイギリス紳士のような姿だ。窓にかけよると、鳥はすぐに飛び立った。

わたしは、この町の新入りである。ヒヨドリは、縄張りに現れた、怪しい者を、チェックしてきたのだ。わたしは、彼の面接に合格しただろうか。

陽が射す窓から顔をだすと、ヒヨドリは羽と尾羽を美しく広げて、円を描いて飛んでいった。

おわり